

## 二つの祖国

—デフォレスト先生召天40年を記念して—

理事長・院長 森 孝 一

今年(2013年)は神戸女学院が神戸から西宮市岡田山にキャンパスを移転して、80周年にあたる。また、それを成し遂げた第5代院長デフォレスト(Charlotte Burgis DeForest)先生の召天40周年の年でもある。

本稿において、シャーロット・デフォレスト先生の生涯を振り返り、その業績に感謝すると共に、デフォレスト先生を通して示された、先生の信仰に思いを馳せたい。

父親であるジョン・デフォレストと母エリザベスが結婚したのは、南北戦争が終了して9年後の1874年9月23日であった。その2週間後の、10月6日に開催されたアメリカン・ボード第65回年会に二人は出席している。アメリカン・ボードは会衆派教会(日本では日本組合教会)の海外宣教組織で、その総会にあたる年会は、その年、海外に派遣される宣教師たちの壮行会でもあった。その同じ年会に、デフォレスト夫妻と同じく、10年間のアメリカでの留学を終え、日本に準宣教師として派遣される1人の日本人がいた。後に同志社を設立した新島 襄である。

年会の会場は、ヴァーモント州ラットランドのグレース・チャーチ。この地名は同志社関係者にとっては、一種の「聖地」である。通常は宣教師となる決意表明を行うところなのだが、新島は非常な決意を持って、用意した異例の演説を行った。それは日本に基督教に基づいた大学を設立したい。そのため

「私は千ドルをささげる。」、「私は5百ドル」とつぎつぎに声上がり、あ

とで追加されたものも含めて、総額は5千ドルに上った。これが同志社設立の核となったのである。5千ドルの中には、帰りの汽車賃をささげた農夫からの献金2ドルも含まれていた。

このラットランドのアメリカン・ボード年会が、新島とジョン・デフォレストとの関係の始まりとなった。年会の25日後の10月31日、新島とデフォレスト夫妻は同じ船でサンフランシスコを出発し、約1ヶ月の航海の後、11月26日に横浜に到着した。

デフォレスト夫妻は新島と共に、大阪の居留地内のアメリカン・ボードの宣教師たちと一緒に暮らした。シャーロット・デフォレストは、1879年2月23日、大阪の居留地で誕生した。誕生から3ヶ月後の5月11日に大阪教会で、シャーロットは新島から幼児洗礼を授けられている。デフォレスト先生は三人姉妹で、姉のサラは夫のウィリアム・W・ペタスと共に、中国で宣教師として働いた。妹のルイズは、現在の同志社女子大学の前身であった同志社女子部で教鞭をとった。

同志社英学校が設立されてから11年後の1886年、父ジョン・デフォレストは新島に乞われて、「第二の同志社」ともいうべき「東華学校」を創立するために、家族と共に仙台に移り住んだ。しかし、東華学校は1892年に廃校となる。1890年に新島が召天したことで、日本が国家主義的社会となり、キリスト教に対する社会的抑圧が強くなり、学校を維持するための募金が集まりにくくなったことが廃校の原因であったと言われている。

ジョン・デフォレストは、1887年には日本組合教会宮城教会(現在の仙台北教会)の設立に関わり、1年間、仮牧師を務めた。父、ジョンは1911年に亡くなるまで、25年間仙台での宣教に従事した。デフォレスト先生は7歳からボストンの高校に入学する15歳まで8年間、仙台で少女時代を過ごしたことになる。

デフォレスト先生はボストンの高校を卒業後、マサチューセッツ州ノーサンプトンにあるスミス・カレッジに入学した。スミス・カレッジは現在もアメリカを代表する女子リベラルアーツ・カレッジであり、父ブッシュ大統領夫人のバーバラもここを卒業している。

デフォレスト先生は1901年にスミス・カレッジを卒業し、2年後の1903年、24歳のときに、アメリカン・ボード宣教師として、9年ぶりの日本に着任した。その時の様子をのちに当時を振り返って、次のように記している。「横浜の港に近づくと、朝日に輝く雪をかぶった富士山の頂上が遠く見えて、いうにいわれない感動をいたしました。やはり縁のある日本へ『帰る』（『』は筆者）と心が落ち着きました」（「わが心の自叙伝 シ、ビ、デフォレスト」、「神戸新聞」、昭和42年4月20日）。デフォレスト先生にとっては、やはり日本に「帰る」という表現が、自然であったのだろう。

先生は1905年に神戸女学院に着任し、1915年に、第5代院長に就任する。その年は、神戸女学院の創立40周年の年であった。

デフォレスト先生は、1915年から1940年まで25年間、院長として働かれた。先生については、さまざまな印象や評価がこれまで語られ記されてきたが、本稿においては、同じ院長として働いている者として、学校経営という視点から、デフォレスト先生の業績を考えてみたい。

このあと紹介する先生の業績については、すでに神戸女学院の歴史として記録されているものである。しかし、そのひとつひとつが実際にどのように決断され、実施されたのかを想像してみると、デフォレスト先生は宣教師という枠を超えて、学校経営者として、他の追随を許さないほどの、並々ならぬ能力を持っておられたことが明らかになってくるだろう。

院長就任後8年の1923年、神戸女学院は手狭になった神戸の山本通のキャンパスから、神戸よりも西に位置する大蔵谷(明石)の丘陵地帯への移転を計画した。約2万坪の用地は、同窓会が13万7千円で購入し、学院に寄付することになっていた。これは大学のみの移転であったが、その後、現在のキャンパスである岡田山(西宮)に全学移転することになった。全学移転の方が効率的であり、人口も少なく、アクセスも不便な大蔵谷よりも、大阪・神戸の双方からのアクセスが便利な岡田山の方が将来性があると考えての、移転方針の大きな変更であった。すでに高額の用地買収費用を用いて学校用地を購入した後の方針転換

であり、現在、同じようなことを行うことができるだろうかと考えてみると、デフォレスト先生の決断力に驚かされる。

移転場所変更の背景には、デフォレスト先生が中心となって進めていた、神戸女学院の有り様についての方針転換、現在の言葉で言えば大学改革があった。デフォレスト先生が神戸女学院に院長として就任された1915年(大正4年)の学生数は278名であった。ところが24年後、デフォレスト先生が病氣療養のためにアメリカに一時帰国される前年の1939年(昭和14年)の学生数は1007名に増加している。太平洋戦争へと向かっていた全体主義の時代に、キリスト教主義学校であった神戸女学院がこのような規模を拡大したことは、デフォレスト先生の経営手腕に負うところが大きかった。

最初に計画された大蔵谷への移転案(1922年)では、全学生の80パーセントを収容することのできる寮の建設が計画されていた。しかし、岡田山への移転時(1933年)の寮生の割合は12パーセント(718名中、88名)であったと記録されている。当時としては辺鄙な土地であった大蔵谷から、交通の便が整っている岡田山へと移転先を変更することによって、アメリカのリベラルアーツ・カレッジに習った、ほぼ全寮制の学校から、大阪・神戸地域の自宅から通学する学生を中心とするリベラルアーツ・カレッジへと、神戸女学院のあり方は変更されたと考えていいだろう。このような神戸女学院の有り様を大きく変更する決断を、デフォレスト先生は果敢に行われたのである。

現在の岡田山キャンパスの広さは大蔵谷と同じ約2万坪であったが辺鄙な大蔵谷と違い、岡田山の評価額は25万円であった。竹中工務店の店主(社長)竹中藤右衛門は神戸女学院の教育への志に賛同して、この代金を学院に提供し、10万円近く値段の差がある大蔵谷の敷地を交換の形で引き取ってくださった。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計による現在の岡田山キャンパスの校舎群の建築費用は、アメリカのキリスト者からの浄財によって賄われた。募金のために腐心してくださったのは、1920年に創設されていた Kobe College Corporation であった。集めてくださった募金の総額は70万ドルにのぼったと記録されている。

今回、「当時の70万ドルは現在の時価では、いくらぐらいになるのか」を調べてみた。日銀の消費者物価指数で1933年と比較すると、現在の物価は約150倍になっている。為替レートが1ドル100円であるとして、70万ドルは7千万円であり、その150倍は現在の105億円に相当することになる。

全面キャンパス移転を可能にするための70万ドルの献金をアメリカで募金し、それを神戸女学院が受け取るために、デフォレスト先生は献金を集める側と受け取る側の双方を、法的に認められた法人とすることを計画した。このあたりが、普通の婦人宣教師とは異なった、非凡な経営の才の持ち主であったと言えるだろう。

Kobe College Corporation の設立以前、アメリカン・ボードから神戸女学院への財政的支援は、アメリカン・ボード内の中部女性伝道会(Woman's Board of Missions of the Interior)によって行われていた。当時、アメリカン・ボード内に3つの地域の女性伝道会が設置されていた。これはアメリカ社会全体に当時見られた、女性の社会進出の一事例であったと言える。従軍看護婦などとして南北戦争に女性が参加したことが、女性が家庭を守るだけでなく、社会参加する契機となったと言われている。

デフォレスト先生は中部女性伝道会の神戸女学院関係者を中心に、Kobe College Corporation(KCC)を結成し(1920年)、この組織の法人格をイリノイ州によって公認させることに成功した。これによって、神戸女学院支援のための募金活動が法的に保障されることとなった。

それでは KCC からの寄付を受け取る側である神戸女学院側の法的整備については、どのようになされたのだろうか。デフォレスト先生は1927年に、神戸女学院を財団法人として登記した。財団法人神戸女学院の誕生である。財団法人となることによって、神戸女学院は KCC からの寄付を、日本において受け取るための法的整備が整った。

財団法人となった神戸女学院の経営は、それまでのアメリカン・ボードの日本宣教団(Japan Mission)に代わって、財団法人神戸女学院理事会が行うことに

なった。形式的には、神戸女学院がアメリカン・ボードから独立したことになる。しかし、神戸女学院理事会の理事の大半は、KCC の推薦理事であったので、アメリカン・ボードの後継団体である KCC が神戸女学院の実質的な経営主体であったと考えていいだろう。

デフォレスト先生が院長であった時代は、日本が太平洋戦争へと向かう国家主義の時代であった。ソールチャペルの前の中庭の一隅に、天皇皇后の「御真影」を納める「奉安殿」が建設され(これもヴォーリズの設計であった)、祝日には院長として、学生たちに教育勅語を朗読することが求められた。デフォレスト先生は十分に準備し、その努めを果たされた。神戸女学院を存続させるための方策であったのだろう。

太平洋戦争中、神社参拝や戦勝祝賀行列に参加するかどうか、神戸女学院にとっては難しい問題であった。神戸女学院で働いていたアメリカン・ボードの宣教師 9 名のうちの 7 名は、神社参拝、戦勝祝賀行列には参加しなかったが、デフォレスト先生ともう 1 人の 2 名は参加した。

このような全体主義的な社会状況の中での学校経営は、デフォレスト先生にとっては大きなストレスとなったに違いない。先生は体調を崩し、1940年、療養のためにアメリカに帰国することとなった。

帰国当初、先生は南カリフォルニアのリマ・リンダのサナトリウムで療養され、退院後は、ロスアンジェルス近郊クレアモントにある宣教師のためのリタイアメント施設「ピルグリム・ブレース」に滞在された。その後、ボストン近郊アバンデールのミッショナリーハウスに移られた。竹中正夫氏は「日本で生まれ、一生を日本での働きに捧げた彼女にとって、北米にはふるさとはなかった」と記されている(『C・B・デフォレストの生涯』、162頁)。

デフォレスト先生は1944年 6 月、カリフォルニア州マンザナーの日系人強制収容所のカウンセラーとなり、強制収容所が閉鎖された1945年11月まで、収容されていた日系人のために働かれた。

日系人強制収容所は日系人によるスパイ活動を防止するために、1942年、ルーズベルト大統領が発令した「大統領令 9066 号」によって設置された。マン

ザナーはカリフォルニア州とはいえ、ロッキー山脈を越えた内陸部にある。現在は歴史的記念施設として、さまざまな施設ができ、見学者を迎えていると聞くが、私が訪れた1970年代半ばの当地は、何もない砂漠に近い荒れ地であった。そのマンザナーに約1万人の日系人を収容するための「バラック」が建てられた。全米では約12万人の日系アメリカ人が強制収容所に収容された。

アメリカの大学院に留学中、私は3年間、サンフランシスコ近郊のエルセリート市にある日系人教会の日本語担当の牧師として働かせていただいた。その当時、まだご存命であった強制収容所経験者の1世、2世の方々から、強制収容所での体験についてのお話をうかがう機会があった。人権が無視された環境での厳しい収容所生活についてのお話であったが、何よりも彼らにとって耐えがたいことは、「どうして昨日までアメリカ人であった自分たちが、強制収容所に入れられなければならないのか」という問いであった。

強制収容所の若者の多くは、自分たちは日系「アメリカ人」であることを訴えるために、強制収容所から軍隊に志願した。彼らによって編成された442連隊は、ヨーロッパ戦線の最激戦地に派遣され、平均の戦死者数をはるかに超える戦死者を出したが、彼らはそのことによって、国家への忠誠を証しようとしたのであった。

終戦後、強制収容所から出た2世たちは、強制収容所での苦い経験を踏まえて、以前にも増して、アメリカ社会への同化に努めた。家庭では子供たちに日本語を使用することを禁止した。そのために、日系3世、4世は日本語を十分に理解することができなくなった。これが「第二の悲劇」を生み出した。1960年代、70年代になって、多文化主義が評価され、それぞれの民族的背景について学ぶことが奨励されるようになったとき、日系アメリカ人の3世、4世には、それを学ぶための手段としての日本語能力が備わっていなかったために、日本語を学ぶために、大変な努力が必要となったのである。

アメリカにとって日本と同じ敵国であったドイツ系アメリカ人やイタリア系アメリカ人は、強制収容所には入れられていない。日系人強制収容所は人種差別に基づいた、明らかに間違った政治判断であった。アメリカ連邦議会は1988

年、「市民的自由法」を制定し、「日系アメリカ人の市民としての基本的自由と憲法で保障された権利を侵害したことに對して、連邦議會は國を代表して謝罪する」として、強制収容所に収容され、当時生存していた者に対して、一人2万ドルの賠償金を支払った。保守主義者として有名なレーガン大統領の時代であった。

戦時下という非常時に、不正な政策が実施されることは、どこの国にもあることである。しかし、戦争が終わり、日常が取り戻された後に、たとえ戦時下であったとしても赦されることのない人権侵害について過ちを認め、謝罪と賠償を行うかどうかによって、国家としての品格が問われるのではないだろうか。

デフォレスト先生は1944年7月8日、友人宛のマンザナーからの最初の手紙に、「二つの愛する國のため、そして神の國のために働くことができることを喜んでいます」(竹中、182頁)と記されている。しかし、デフォレスト先生がご自分にとっての「二つの祖国」のために働いたのは、マンザナー強制収容所だけではなかった。

デフォレスト先生が1943年に、ロスアンジェルス近郊クレアモントのパモナ・カレッジ(Pomona College)で日本語を教えたことは知られている。一昨年(2012年)9月に、私はパモナ・カレッジを訪問した。パモナ・カレッジは神戸女学院とよく似たスパニッシュ・ミッションスタイルの建築であり、神戸女学院のヴォーリズ建築への影響を探るための訪問であった。その時、パモナ・カレッジの日本語担当教授にデフォレスト先生がパモナ・カレッジで日本語を教えたことを話した。しかし、返ってきた答えは「そんなことはないはずだ」というものであった。パモナ・カレッジには以前から中国語のクラスはあったが、日本語のクラスが設置されたのは1980年代になってからだというのが、その理由であった。不思議に思いつつ、疑問を残したままで、その時は帰国した。

帰国後、院長室課長の井出敦子さんから、数年前に、神戸女学院の同窓会である「めぐみ会」から院長室に一時貸し出されたアルバムについての説明を受けた。アルバムの所有者は元神戸女学院大学音楽学部教授であった石川美智子



先生で、石川先生のご遺族がめぐみ会に寄託しておられたものだが、そのなかにデフォレスト先生の写真があったので、院長室にお知らせくださったのである。

石川先生は太平洋戦争直前の1930年代後半に、本学院からの交換留学生として、アメリカのオリベット・カレッジ(Olivet College、ミシガン州)に留学されていた。デフォレスト先生の写真は、戦後、どなたかから石川先生に送られたものと思われる。

井出課長がアルバムと写真を調べていると、アルバムのデフォレスト先生の写真の後ろから、四つに折りたたまれた一枚の文書が出てきた。この文書はパモナ・カレッジのニューズレター(?)である *The Pomona* に掲載されたデフォレスト先生を紹介する記事を翻訳したものであったが、この記事が何年に書かれたのか、誰が日本語に翻訳したのかについては、何も書かれていない。デフォレスト先生の紹介記事の最後に、「一九四三年にはパモナ・カレッジで、陸軍の兵士達の語学のクラスで、・・・日本語を教えた」と記されていた。デフォレスト先生が日本語を教えたのは、学生に対してではなく、先生にとっての第二の祖国ともいうべき日本と戦うために、先生の祖国であるアメリカの陸軍の兵士たちに対してであったことが明らかになった。ドナルド・キーン、エドワード・サイデンステッカー、オーティス・ケーリらが訓練を受けた、コロラド大学の海軍日本語学校はよく知られている。しかし、パモナ・カレッジにおいても、諜報活動のため日本語教育が行われており、デフォレスト先生はそれに関わっておられたのである。

その後、調べてみると、石井紀子氏が2009年に発表された論文「太平洋戦争と来日アメリカ宣教師—シャーロット・B・デフォレストとマンザナー日系人収容所の場合」(『大妻比較文化』10 [Spring, 2009]、7頁)のなかで、デフォレスト先生の手簡から、「日系二世の兵隊」に日本語を教えたことを明らかにされていることが分かった。

デフォレスト先生はパモナ・カレッジでアメリカ陸軍軍人のために日本語を教えた翌年、マンザナー強制収容所で日系アメリカ人のために働くことを決意

された。山崎豊子は小説『二つの祖国』で、マンザナー強制収容所に収容され「二つの祖国」の間で揺れ動いた、ロスアンジェルス日本語新聞社の記者天羽賢治の姿を描いている。パモナ・カレッジでアメリカの陸軍兵士に日本語を教えた翌年に、日系人が収容されているマンザナー強制収容所で、日系人のために働くことを決意されたことは、デフォレスト先生の心もまた、「二つの祖国」の間で激しく揺れ動いていたことを物語っている。

デフォレスト先生にとっての「二つの祖国」が戦うことは、先生にとっては、大きな悲しみであったに違いない。しかし、信仰の人であったデフォレスト先生は、自分にとっての本当の故郷は天にあると信じておられたに違いない。デフォレスト先生にとって、アメリカも日本も、真実の「ふるさと」あるいは「天の故郷」に至るまでの、「仮の宿り」であり、自分は真実の故郷へと歩み続ける「旅人」であり、「寄留者」であると考えておられたのではないだろうか(新約聖書ヘブライ人への手紙11章1節、13-16節参照)。

\*本稿は、2013年6月30日(日)仙台北教会での説教「2つの祖国」をもとにして、『学院史料』のためにご執筆頂いたものである。